

iPad を活用した活動報告書

報告者氏名：菊地隆介 所属：岩手県立釜石祥雲支援学校 記録：24年3月

活動内容のタイトル：「iPad を活用した疑問文の獲得」

活動内容の概要：

人との話し方に困難を抱える自閉症の児童Aに、iPad のアプリ「絵カードコミュニケーション」を活用して疑問の定型文を身につけられるようにした。補助教材としてスケッチブックに疑問詞を空欄にした文を提示し、正しい疑問詞を選ぶことを目指した。

【対象児の情報】

・学年

小学部6 学年

・障害名

自閉症

・障害の困難の内容

Aが生活の中で特に困難を抱えているのは、コミュニケーション面である。特徴として、自分が知りたいことや気になったことを支援者や親、友達に繰り返し話し続けることが挙げられる。相手によっては意図を読み取れないことがあり、答えられない場合にAは混乱して大きな声を出したり、自傷・他害行為に及んでしまうことがある。

【活動内容】

・当初のねらい

Aが疑問文を獲得し、支援者とのコミュニケーションを円滑にすることで、日常生活における混乱を減らす。

・実施期間

23年9月～24年2月

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

Aは5学年の時に本校に転入し、慣れない行事に混乱したり、友達や支援者にうまく思いが伝えられず、他害行為に及んだりすることがあった。特にスケジュールについては強い関心があり、知りたいことを尋ねるのだが、独特の言い回しをするため周囲が意図を理解することが難しく、納得できずに怒りだして大きな声を出すことがあった。

・活動の具体的内容

自立活動の時間に「絵カードコミュニケーション」のアプリを使用した。Aがよく尋ねようとする言葉と疑問詞をイラスト付きでカード化し、担任の声を吹き込んだ。本来コミュニケーションツールのアプリであるが、カードの並び替え操作と音声読み上げ機能に着目し、疑問文は「ですか。」「ますか。」といった表現が使われることに視覚的・聴覚的に気づくことをねらった。

数十枚のカードから2～3枚を選び正しく並べることによって、正しい疑問文が完成する。並び替えの後に指導者に正解かどうか尋ねて、正しければ音声を聞いて発音し、次の問題に進む方法をとった。言葉の並

べ替えの補助として、スケッチブックに疑問詞を隠した文を書き、それに沿って進めた。



・対象児（群）の事後の変化

iPad を使用し始めてからすぐに、A の口調に変化が表れた。聞きたいことがあると、じっくり考えてから語尾に「ですか。」「ますか。」「を 付け加えるようになってきた。「～あるの。…ですか。」「～は。…ですか。」のように、たどたどしいながらも学習したことを生かそうとする様子が見られた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・気づき

A は覚えた疑問詞を使って、正しく尋ねることができるようになった。さらに、教えていない（カード化していない）言葉を自分で考えて話すことができるようになった。

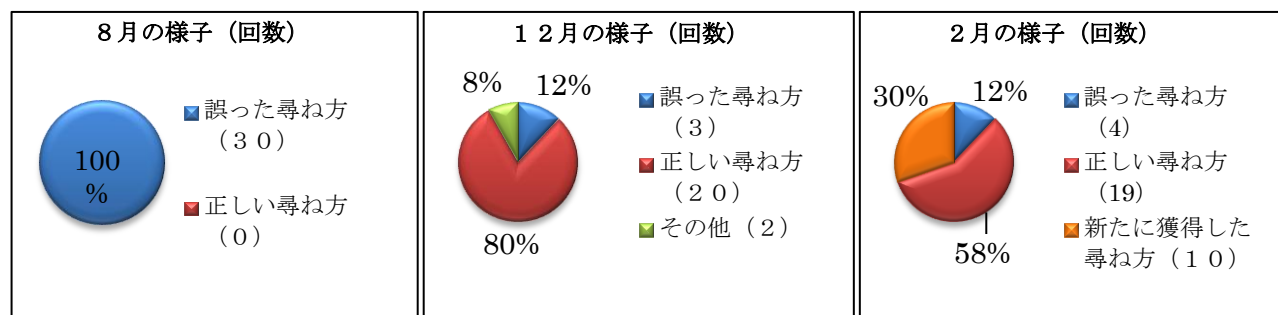
・エビデンス

【表 1】に A の言葉の変化を、【表 2】に正誤の回数と割合の変化を示す。

【表 1】

A の誤った尋ね方	A が獲得した正しい尋ね方
「CD。」「CD は。」 「〇〇くん、CD。」	「CD を聴きますか。」 「〇〇くんは、CD を聴きますか。」 「CD を消してもいいですか。」
「掃除の先生。」 「生単の先生。」 「お弁当の先生。」	「掃除の先生は誰ですか。」 「生単の先生は誰ですか。」 「お弁当の先生は誰ですか。」
「あと。」	「あと何回ですか。」「腹筋はあと何回ですか。」
「トマトキッズはまだだつて。」 (学級通信)	「トマトキッズはいつですか。」
「洗いものは。」 「洗いものはありませんよ。」	「洗いものはありますか。」
「今日は。」 「今日はビデオは。」「ビデオは見ませんよ。」	「ビデオを見ますか。」 「今日はビデオを見ますか。」
「ランニングは。」 「ランニングはありませんよ。」	「ランニングはありますか。」 「ランニングをしますか。」
「今日は。」「今日はマンデーの日。」	「今日は何曜日ですか。」「今日はマンデーですか。」
「しゃくなげ分教室は。」	「しゃくなげ分教室に行きますか。」
「冬休みのプリント。」	「冬休みのプリントは何ですか。」

【表 2】



【表 1】からは、今まで使ってこなかった疑問詞を獲得したことがわかる。

【表 2】からは、授業の積み重ねとともに誤った尋ね方が減り、新たな尋ね方も獲得したことがわかる。12月の「その他」は自分で工夫しようとした言葉を示している。支援者とのコミュニケーションが成り立つようになり、積極的に人に話しかける様子が見られるようになったことは大きな成果であった。しかし、会話中にAが大きな声を出して怒る回数自体は減らなかった。その理由としては、支援者が答えに困るような未来のことを質問してきたり、Aの望む答えが返ってこない場合があることが挙げられる。それでも他害行為はほぼ見られなくなっている。

・その他エピソード

Aは iPad をすぐに受け入れ、様々なアプリを試したり、インターネットに接続して情報を得たりすることにも積極的であった。今回の実践では「絵カードコミュニケーション」を、文節に区切ったカードの並び替え教材にすることで疑問文の成り立ちを身につけることができた。言葉による指導だけではなかなか身につけにくい話し方も、操作や音声のある教材であれば獲得しやすいようである。